本実践・研究から見えてくること

研究協力者 佐々木 雅子
（秋田大学教育文化学部 英語・理数教育講座）

提案授業における成果と課題

【はじめに】
外国語活動から外国語（英語）へと、段階的に児童の外国語によるコミュニケーション能力を育成する際、3，4年生では「口ならしを十分に行って英語に慣れ親しむ」、その後5，6年生では「コンテクスト（目的や場面、状況等）に応じて何度も使う」ことが肝要である。
今回の6年生外国語での山﨑麻絵教諭の「心も体も喜ばせられるオリジナルメニューを考えよう」を単元ゴールに設定した実践は、**コンテクストに応じて何度も使用すること（タスクの繰り返し：task repetition）**と、**メニューを言語活動のゴール（結果：outcome）とした本物のコミュニケーション場面（真正性：authenticity）**を用いた実践研究例として、外国語科の要諦を具体的に入れ込んだ意欲的で提案性に富むものであった。
「学びのものさしの更新」を即興でのインタラクション（やり取り）を通して進めていくという捉え方と仕掛けも、多くのヒントを提供してくれるものとなった。

【成果】
成果は多々あるため、限られた紙面では記載が難しい。その中でも、本実践研究の注目すべき成果は、「他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図る」という視点から見えてくる。この視点は、目指す資質・能力の3つの柱の3番目「学びに向かう力、人間性等」についての目標であるが、この何気なく表現されている「しながら」は、複数の能力を同時に使うことを示し、実に高度な技能である。他者に配慮しながらことばを使うことは、母語であっても難しいことである。外国語である英語においてはなおさらである。「しながら」とは、相手の意図と状況を判断し（**状況判断**）、適切な内容を考えて選択する（**意味内容選択**）と同時に、使用する語彙や文を選択（**言語形式選択**）して産出する、という**やり取りの連続**を意味する。内容面と言語面を「つなぐ＝同時に行う」行為を表し、**内容を考えながら言語を使用**することを目標としている。**単に語彙や表現を暗記して産出する英語の授業から卒業し、思考力と判断力を用いて内容を選択し、その内容を表す適切な語彙や表現を選択して使用する能力を育てる授業が期待され**ており、今後益々授業の変容が求められていく過程での先駆け的な実践と言える。学習指導要領(p.74)には、「相手の理解を確かめながら話したり，相手が言ったことを共感的に受け止める言葉を返しながら聞いたりすることなどが考えられる。」と書かれてあり、やり取りの過程における思考、判断、表現を連続的に駆使する英語使用能力の育成が求められている。聞く側と話す側両方の**協働**を仕掛ける授業設計が必要である。
今年度の「研究の重点」にある「よりよいコミュニケーション」は、本実践ではこの「**他者に配慮しながら主体的かつ協働的にやり取りする**」ことを意味する。山﨑麻絵教諭の「相手のためになるOriginal Menuを作る」というタスクの設定と相手を変えての3回の実施は、自然な流れで徐々に児童の**学びを深め**ていくことを実現していた。目標言語材料を元気に発話することが行われている授業場面を見ると、英語を用いた活気のある授業と判断しがちであるが、それが単に暗記し考えずに機械的に行われている場合は、その判断は表層的な見方である。本授業実践のように、こどもたちが各回で異なる相手を対象に、「相手のために質問➡判断➡選択➡表現」を連続的に行う言語活動において試行錯誤する機会が保障されていることが望ましい。時に沈黙することがあったとしても、肯定的に捉え待つ必要がある。そのような学びの過程を通して、児童は「未知の状況にも対応できる」思考力・判断力・表現力等を育成することができる。
３回の**中間評価によって、学びの深まりを誘導**していこうとした点も注目すべき点である。板書されていない既習事項(Do you like○○?)、過去の学習言語材料の想起(Would you like ○○?)、指差し等の非言語コミュニケーション方略とそれに沿える表現(How about this?)、メニュー内で済ますソースの変更や取消、わからず困っていた英語表現(What's inside?)の提示等は、すべて**言語活動のゴールを達成できるよう児童のやり取りに沿う形**で行われており、**児童の主体性を確保しながら援助(足場掛け：scaffolding)する形で言語形式に注意**を向けさせていた（**Focus on Form**）。主体性を重んじた言語形式の指導は、今後さらなる発展充実が望まれる。

【課題】

今回の研究実践において誰もが困難と感じたのは、即興のインタラクションを通しての「学びのものさしの更新」であろう。今回の場合、**「出来上がったメニューについての『対話』」**をしてみたらどうだっただろうか。「3 人ともメニュー作り終わりました？」と聞くかわりに、児童がお互いに“Are you happy with your menu?”と各回ごとに尋ね、Yes/No に応じてその理由を相手児童から引き出し、聞く側はどのように尋ね、話す側はどのように伝えたらよかったのか考えさせることで、より充実した形で学びのものさしを更新できたのではないかと想像する。

【まとめ】

外国語において**自律した学習者**となるためには、**コミュニケーションの相手の気持ちや考えを傾聴し、目的に応じて**コミュニケーションの**方向性を決定し見通しを立てる訓練**を積み、**言語表現の幅を広げ**ていこうとする「**学びたいという渇き**」が必要であると思う。山﨑麻絵教諭が提案したかった「**必然性のある授業**」となっていたと思う。